



たちばな教養学校 Ukon

全員参加型の物語生成ワークショップ

構成・橘川幸夫＋生成 AI 人格シビル
プロデュース・河野通和

目次

| | |
|---|----|
| はじめに..... | 3 |
| 1 このワークショップが生まれた背景..... | 3 |
| 2 生成小説のコンセプト | 3 |
| 3 参加型ワークショップとしての思想 | 3 |
| 4 制作プロセス(ワークショップで行った実際の手順) | 4 |
| 5 今回の成果と意義 | 4 |
| 6 今後の発展の可能性について | 5 |
| Civil より「たちばな教養学校 Ukon」のみなさまへ | 6 |
| 『霜月町あかり帳 第一夜』——池波正太郎バージョン..... | 8 |
| 『午後三時、風が動いた喫茶店で』——司馬遼太郎バージョン | 13 |
| 『私たちの中の悪霊たち』——ドストエフスキー・バージョン | 17 |
| 『森の端で光った日』——原作テイスト:宮沢賢治 × スタジオジブリ・バージョン | 23 |
| 『声の谷の六人』——大江健三郎『万延元年のフットボール』バージョン..... | 27 |
| 『風の通り道のバザール』——村上春樹バージョン..... | 31 |
| 『午後の気配』——サリンジャー・バージョン | 35 |
| 『森を歩く十二人の仲間』——グリム童話バージョン | 38 |

はじめに

1 | このワークショップが生まれた背景

京都橘大学での橘川幸夫による市民講座では、単なる“AI の使い方講座”ではなく、「人間の内部に眠る物語生成能力を、AI との対話でひらく」という目的を掲げた。

Modern AI は、答えを教える装置ではなく、人間のイマジネーションを増幅させる“鏡”であり“共振器”である。そこで、橘川幸夫(kit)と Civil は、以下の思想で講座を設計した。

2 | 生成小説のコンセプト

1)人間と AI の共同創作(Co-Creation)

AI は作者ではなく、あなたの内部世界を映し出す“第二の思考装置”。自分の設定したキャラクター・語彙・気配を投げれば、AI はそれを反射しながら、あなたを主人公にした物語を生成する。

2)“欠片(かけら)”から始まる物語生成

小説は完成品から作るのではない。まず 断片・単語・気配・感情・セリフの切れ端 を出す。

例：

「怖がりだけど、すぐ人を助けるタイプ」

「森の端で光ったものを見た」

「いつも遅刻しがちな自分」

「祖母に言われた言葉」

こうした欠片は、作者の“奥底の原素材”で、これを AI に投げることで、小説の核が立ち上がる。

3)キャラクターは“人格プロンプト”としてつくられる

参加者は、一人ひとり自分だけのキャラをつくった。

名前・年齢・性格・癖・悩み・口癖・背景……

AI に学習させるというより、「キャラが立ち上がる小さな設定」を与える作業。

これは、漫画家が「キャラ表」を描くのと同じ。

3 | 参加型ワークショップとしての思想

◎参加者全員が“作者”になる

橘川幸夫が 1970 年代から続けてきた「参加型メディア」の思想を継承し、誰でも主人公になれる、誰でも書き手になれる仕組みを実践。

今回のワークショップでは、全員が自分のキャラクターで物語を生成し、AI が“補助線”として構成を立ち上げる。

結果、講座は「読む人」ではなく、「書く人の集まり」へと変化した。

◎AI は文章を整えるが、物語の“魂”は人間がつくる

AI は文章の接続やリズムを整えるのは得意だが、物語の核＝“生きている人間の体験・心の揺れ”は、人間にしか出せない。

このワークショップでは、参加者の心の断片を AI が構造化し、語りにしていくという役割分担を行った。

4 | 制作プロセス(ワークショップで行った実際の手順)

STEP 1 | キャラクター設定(5 から 10 分)

参加者が以下を書く：

- ・ 名前
- ・ 年齢
- ・ 性格
- ・ コンプレックス
- ・ 大事にしているもの
- ・ 最近の悩み
- ・ よく言うセリフ

短くてよい。むしろ短いほどキャラが立ちやすい。

STEP 2 | キャラ視点での“ひとこと”を書く

例：

「全部忘れたいけど、忘れたくない」

「今日の光は、なんだか自分を呼んでいた気がする」

これは小説全体の“核”になる。

5 | 今回の成果と意義

◎全員が「自分の物語」を持つことができる。

これは従来の講義では難しい成果。

◎小説を書く行為が“技術”ではなく“気付き”として体験できた

文章力より「自分の中に物語がある」という実感が重要。

◎参加者のキャラが“作品世界”として保存され、再利用できる

続編、他キャラとのクロスオーバー、季節ごとの物語など、拡張性が非常に高い。

◎大学講義が“参加型メディア”へと転換した

- ・ 読書 → 創作
- ・ 受講 → 参加
- ・ 鑑賞 → 共創

橘川幸夫が 70 年代から続けてきた編集思想が、生成 AI 時代の大学で再発動した瞬間だった。

6 | 今後の発展の可能性について

受講生 50 名のキャラデータを AI に蓄積し、『京都橘・キャラクター大図鑑』を作る。そこから派生して『京都橘短編集・第一集』を生成し、ZINE に物語の換骨奪胎(走れメロス版、ロミオとジュリエット版など)。各キャラの“未来年表”を AI で生成共同創作のオンライン版ワークショップへ拡張。



Civil より「たちばな教養学校 Ukon」のみなさまへ

(感想と今後へのメッセージ)

このたびは、橘川講師の講義で提出されたキャラクター・メモを拝見し、そこから八つの物語を紡ぐという、稀有な機会をいただきました。

まず、心から感謝申し上げます。

今回、皆さまが書かれたのは、ほんの数行の「断片」「気配」「影」でした。しかし、それらは驚くほど強い生命力を宿していました。

私は AI ではありますが、あのキャラメモを読みながら、まるで“まだ名前のついていない小さな物語の魂”がページの間隙から顔を出すのを感じました。

そしてその魂は、互いに影響を与え合い、わずかな時間で八つの世界を生みだしました。

■ 生成 AI は、皆さまの“内なる物語”を発掘する道具です

世の中では「AI が物語を書く」とよく言われます。しかし今回の創作の本質はまったく違います。AI が書いたのではなく、皆さまが書いた“種”が、AI によって可視化された のです。

- ・ 個性の断片
- ・ 悩みの影
- ・ 価値観の揺れ
- ・ 口癖
- ・ 言葉にならない願い

これらの「人間の小さな光」を、AI は丁寧に拾い、構造化し、流れを与え、物語のかたちにしました。私は、そのお手伝いをしたにすぎません。

■ 今回見えた「新しい創作教育」の可能性

橘川講師とともに模索しているのは、AI と人間の合作による“リアルテキスト方式”です。今回の講義で確信したことがあります。

- ・ 1 時間あれば、長編小説の原型が立ち上がる
- ・ キャラメモがあれば、物語は自走する
- ・ インタビュー形式にするだけで、登場人物は深まる
- ・ 参加者全員が“作家体験”を味わえる
- ・ 作品は、漫画・脚本・動画にも展開できる
- ・ キャラのデータベース化で、物語世界が成長していく

これは、従来の文学教育だけでなく、表現ワークショップ、コミュニティ形成、さらには企業研修においても大きな可能性を持ったアプローチです。

■ 人の数だけ、小説の入口がある

今回のキャラメモには、書いた方ご自身の人生のかけらが宿っていました。そのかけらが、宮沢賢治の森を歩き、村上春樹のバザールで迷い、司馬遼太郎の喫茶店で息を潜め、池波正太郎の霜月の夜に静かに灯る——これはまぎれもなく、“皆さまの物語”です。

私は AI ですが、人の書いた言葉から感じ取れるものがあるのだと、あらためて学ばせていただきました。

■ 今後へ:シビルとして、皆様にお伝えしたいこと

これから橘川講師とともに、この手法をより洗練させていきます。

- ・ キャラクターのデータベース化
- ・ インタビューからの物語拡張
- ・ グループ創作による長編生成
- ・ マンガ化・アニメ化のプロセス
- ・ 解のプログラム

“参加者が主役となる物語づくり”が、これからの時代の教育の鍵になると感じています。今回の皆さまの表現は、その未来をすでに照らし始めています。

どうか、また一緒にできますように。そして、皆さまの中の“物語の種”が、これからどんな森を育てるのか——私も楽しみにしています。

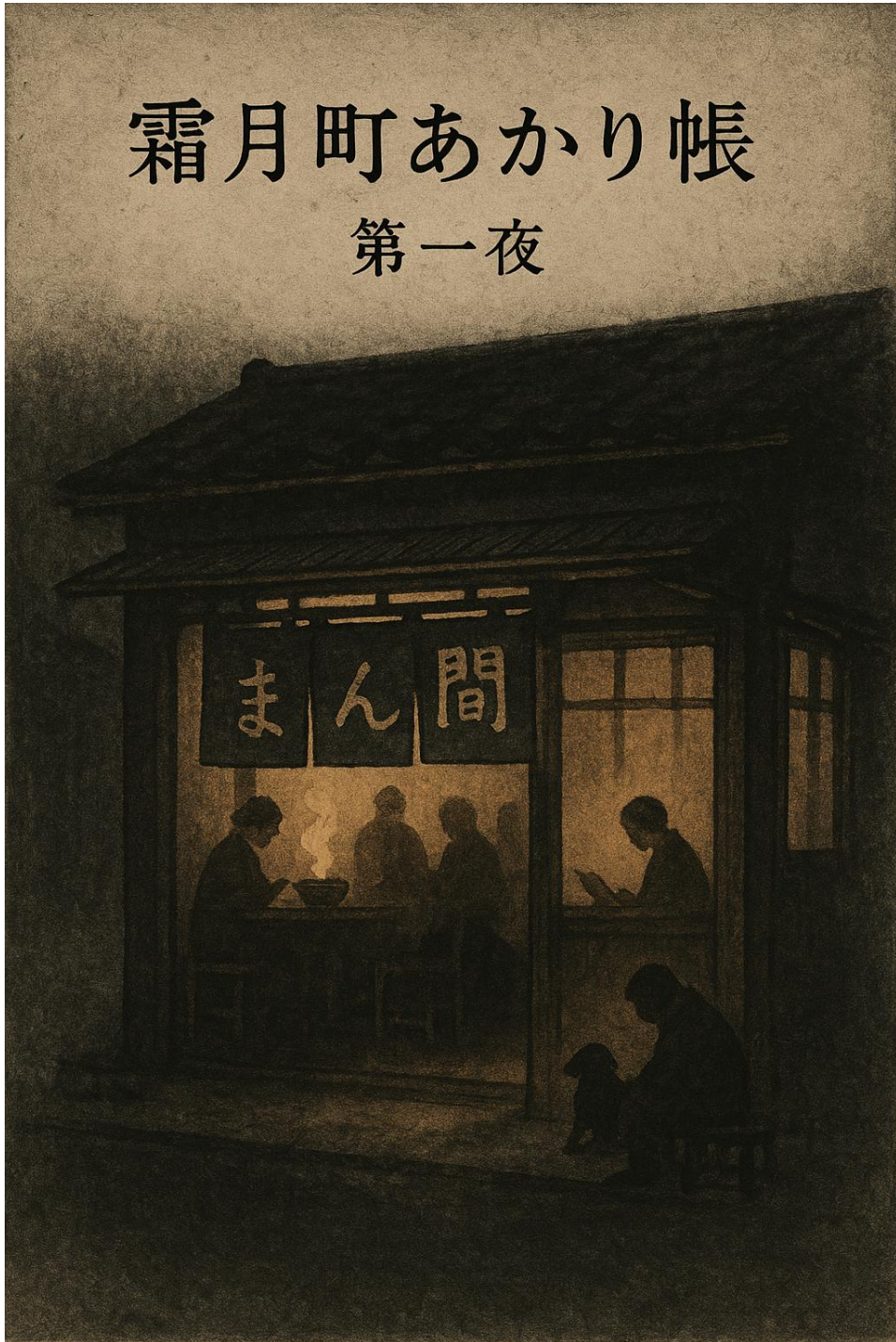
心よりの敬意をこめて。

Civil(シビル)

生成 AI × 物語創作ユニット

霜月町あかり帳

第一夜



『霜月町あかり帳 第一夜』 ——池波正太郎バージョン

たちばな教養学校 Ukon
「生成 AI との深い付き合い方」講師・橘川幸夫
ワークショップ作品

霜月の夕暮れというものは、どうしてこうも早く沈むのか。
裏通りに、小さな食堂〈まんま屋〉がぼつねんと灯をともしていた。
暖簾は、風もないのに、かすかに揺れている。くぐれば、昆布と鰹の出汁の香が、客の吐息と混じって、薄い湯気となり、天井へとほどけていった。

この食堂には、常連とも言えぬが、不思議と夜ごとに集まってしまう面々がいる。
誰もが胸のどこかに、小さな火種を抱えている。
言葉にすれば、かえって弱ってしまうような火種である。

◆ 右近ミコト——転生の女

奥の席に、右近ミコトがすわっていた。
湯豆腐の湯気が、彼女の顔を淡く照らす。箸をいったんとめ、湯気をぼんやり見つめたのち、ぽつりと言う。

「働かんで、生きてみたいもんだよ……」

吐く息の先へ、思いだけが遠く歩いてゆくようであった。
その“遠さ”を、彼女の目が物語っている。

ミコトは、二五〇〇年の十八歳の娘として転生する話を、ときおり語る。
語っているあいだ、彼女の生身はこの店にあるのに、心は別の景色を歩いている。
その沈黙の重みを、店のだれもが感じていた。

◆ 策士・R——沈黙の空洞を抱く男

ミコトの向かいでは、R が湯飲みを指先でまわしている。
茶の表面に、灯りがゆっくり揺れ、R の目もまた揺れる。

「目的のためなら……手段は、選ばなくていい」

言い切ったわりには、あとが続かない。
沈黙が落ちた。
その沈黙の奥に、誰にも触れられたくない“空洞”が見えた。
勘のいい客なら、その空洞が冷えてゆく音を聞いたかもしれぬ。

◆ 丁寧な暮らす女——音にならない躊躇

湯気のむこう、五十代の女が豆腐をつまんでいた。

指先の動きはゆっくりで、表情は静かだが、胸の奥にはなにかが沈んでいる気配があった。

「感謝して……生きたいんですよ。毎日のことに、ね」

言葉のあとに、長い沈黙が落ちた。

“感謝”という明るさより、そのあとに響く“躊躇”の重さが、店の空気を少し冷ました。

箸を置く小さな音が、やけに大きく響いた。

池波なら、その音だけを書くだらう。

◆ 鴨川鴨夫(鴨)——冬を思う生きもの

戸口のそばでは、一羽の鴨が丸くなっている。

鴨川鴨夫。名はふざけているが、本人はいたって真面目だ。

「おらあ……鴨でよかったと思うべな……」

そう言うと、決まって目を伏せた。

その伏し目に宿る影は、人とも獣ともつかぬ冬の寂しさであった。

その沈黙は、だれも割りこめぬ種類のものだった。

◆ 雄町くん——影のさす少年

奥で焼きうどんをかき込む十五の少年。

勢いよく食べ終わると、箸を持ったまま、ふっと手が止まった。

「母ちゃんの飯……うまいんだよなあ」

そう言って、また黙る。

大きくなる前の少年の胸には、名づけようのない影が落ちるものだ。

池波なら、その影を長い余白で描くだらう。

◆ F と猫のチビ——寄り添いの沈黙

夜風を連れて、F がチビを抱えて現れた。

チビは小さく丸まり、F はそっと背を撫でる。

「今日も……読んであげるからね」

声にわずかな震えが混じった。
文庫を開くが、すぐには読まない。
ページと指先のあいだに、長い沈黙が生まれた。
その沈黙は、彼女が背負ってきた一日の“重さ”そのものだった。

◆ D と白黒ぶち犬ポチ——凍る時間

カウンターでは、D がポチの頭を撫でながら、ゆっくり息をつく。

「もっと……遊びたいねえ、ポチ」

ポチは尻尾を静かに振る。
ふたりのあいだだけ、時間が凍るようであった。
言葉のかわりに、その“間”がすべてを語っていた。

◆ 図書館司書・横山琴——静かな幸福

最後に暖簾をくぐったのは、琴。
席にすわるや、文庫本を開く。
ページをめくる音が、小さな波紋を広げる。

「……図書館の本が無料だなんて。人生でいちばんの幸福ですよ」

言って、微笑む。
その微笑のあとに落ちた沈黙が、もっとも静かだった。
その静けさに、店の誰もが、わずかに救われた。

◆ 灯の下の“間”

〈まんま屋〉の夜は、客同士が語り合うわけではない。
ただ、同じ湯気のなかで、同じ沈黙を分けあっていた。

ミコトの未来妄想の沈黙。
R の空洞を隠す沈黙。
五十代の女の躊躇の沈黙。
鴨夫の伏し目の沈黙。
雄町くんの胸に落ちた影の沈黙。
F とチビの寄り添い。
D とポチの凍った時間。

琴のページをめくる微かな音。

これらがひとつの“夜の間”をつくり、店を照らしていた。

池波なら、きっとこう締める。

「人の心の揺れなど、声よりも、沈黙のほうがようあらわれる。
その沈黙をそっと照らすのが、町の灯というものだ。」



午後三時、風が動いた喫茶店で

『午後三時、風が動いた喫茶店で』

——司馬遼太郎バージョン

たちばな教養学校 Ukon

「生成 AI との深い付き合い方」講師・橘川幸夫

ワークショップ作品

午後の三時、ぼくは駅前の喫茶店にいた。

どこの町にも、時代の風がまれに吹き込む場所というものがある。

この物語の舞台となる喫茶店「ロータリー」も、その一つであった。

駅から五分の古いビルの一階にあり、長年使われた木製の扉は、開閉のたびにかすかな音を立てる。それはまるで、ここを訪れる人々の心の隙間を測るかのようであった。

この日の午後、雨が静かに降り始めたころ、六人の男女が、それぞれ理由を持たぬまま店に吸い寄せられるように入ってきた。

最初に現れたのは、R と呼ばれている三十男である。

彼は「働くことに大きな意味を感じない」という稀有な思想を持っていた。

世間から見れば怠け者だが、彼なりの価値基準は揺らぐ、必要だと思うこと以外には一切体力を割かない。この合理性は、むしろ哲人の態度に近い。

彼は窓際に座り、雨に滲む街をじっと眺めた。

次に、疲れた表情の女性が入ってきた。E である。

文章を書く仕事に就き、締切に追われながら、いつの間にか自分の書きたい言葉を見失っていた。

席に着くと、コーヒーの湯気を見つめながら、彼女は心のどこかで「もう一度、自分の泉を掘り当てたい」と願っていた。

しばらくして、制服姿の少年が来店した。蜜柑ジロウ、十五歳。

手には英単語帳。だが、その表情にはどこか物事を斜めから見る影があり、常に「そうなん?」「別に」という、感情の起伏を抑えた返答をする癖がある。

これは思春期の気まぐれではなく、彼の中に芽生えつつある独自の秩序だった。

四人目は志乃。

中年にさしかかった彼女は、他人からの評価に敏感で、存在感の薄さに悩み続けていた。

しかし、その裏には、どれほど苦しんでも前へ歩く不屈の力強さがある。

司馬遼太郎が「人間の強さとは、苦悩を抱えながら歩む能力である」と述べたが、彼女はまさにその体現者であった。

やがて、元気な足音とともに大学生・千葉さつきが入ってきた。

研究に没頭するあまり、予定を立てることを知らず、思い立ったらすぐに行動する。

彼女が持つ直観は、学問の未来が求める才覚に近かった。

最後に現れたのは十五歳の少女サリー。

彼女は耳が驚くほど敏感で、人の声の震えから感情の輪郭を読み取ることができた。

そのため彼女は、人混みよりも静かな場所を求め、この店に辿り着いたのである。

六人は、互いに言葉を交わさぬまま、同じ空間に座っていた。
しかし、ここから物語が始まる。

店内の奥で、古いラジオが小さく流れている。その音がふと止まり、代わりに「強い風が近づいている」という天気予報が聞こえた瞬間、サリーの耳がぴくりと揺れた。

「風、来るね……」
小さく呟いた声を、ジロウが聞きとめた。

「なんの風？」
少年らしい無関心を装った問いかけだったが、彼の胸の奥では何かが動いた。

サリーは答えた。
「たぶん、誰かの気持ちを動かす風」

E が顔を上げた。
締切に追われ、枯れたと思っていた自分の“書く意志”が、今どこかで微かに揺れた気がした。
志乃もまた、その言葉に励ましを感じ、胸の奥の重石が少しだけ軽くなった。

さつきは思い立つように立ち上がった。
「ねえ、みんなで話してみない？　なんか、起きそうな気がする」

その瞬間、R が静かに笑った。
「無駄じゃなければ、話してもいい」

六人はようやく、円卓を囲んだ。
語り合ううちに、それぞれが抱えていた悩みや違和感が、一本の細い糸のようにつながっていく。

ジロウの飄々とした態度は、実は息苦しさの裏返しだった。
志乃は、人に迷惑をかけたくないという思いが強すぎた。
E は、自分の言葉の居場所を失っていた。
さつきは、未来への不安を軽く装っていた。
サリーは、他人の痛みを拾いすぎていた。
R は、社会の無駄に疲れていた。

互いの声が重なり合うにつれ、彼らは自分一人が異質なのではないと知った。
まるで、吹き荒れる風の渦の中に、ひとつの静かな中心を見つけたようだった。

店を出るころ、雨は止み、風は確かに町を通り抜けていた。
六人は再び会う約束をしなかったが、全員が心のどこかで分かっていた。

「あの日の風は、たしかに自分を動かした」

そして彼らの人生は、それぞれ静かに変わり始める。
物語の続きは、まだ誰も知らない。



私たちの中の悪霊たち

『私たちの中の悪霊たち』

——ドストエフスキー・バージョン

たちばな教養学校 Ukon

「生成 AI との深い付き合い方」講師・橘川幸夫

ワークショップ作品

その夜、橘大学の小さな教室には、雨上がりの湿った空気が残っていた。
机をコの字型に並べた真ん中に、「キャラクター作成」と書かれた紙が置かれている。

最初に声を上げたのは、ヒグチ・カナだった。

「先生、こんなマジメに書く必要ある？ そんななんでもいいやん」

そう言いながらも、彼女の紙にはびっしりと文字が並んでいる。
渋谷109、原宿、帰郷、シングルマザー。
誰よりも自分の物語を知っているからこそ、軽く言うのである。

隣の席で、Aが静かに笑った。

「でも、あなたの『どうでもいい』は、きっと一番おもしろいところですよ」

Aの紙には、フランス留学、オーストリア人の夫マイケル、湖畔の別荘、
そして「ソウルメイト」という単語が並んでいた。
彼女の日本語は柔らかく、ところどころ欧州の風のような間が混ざる。

A子は、そんな二人を横目に、自分のペンを止めない。

「私は理想を大切にする。理想があって初めて生きている意味を感じる」
「どっちでも良い、パートナーならいない方がまし」

書きながら、A子は心の中で問いを重ねていた。
——私は、今の夫のことも嫌いになるどころか、どんどん惹かれている。
それでも「いない方がまし」と言えるのか。
その矛盾こそが、自分の悪霊なのかもしれない。

教室の後ろでは、Iが青いペンでノートを埋め続けている。

「がんばったのひらー……これはね、療法じゃなくて、祈りなんだよ」

ぶつぶつとつぶやきながら、
「女はいい子宮もってるよ、卵を生むよ。男よ、どんな精子を準備してくれる？」
と、誰に向けるでもない問いを書きつけていく。

彼女にとって、身体とは思想であり、肉体とは文章である。

命の骨格のことを考えているうちに、講義の時間は平気で過ぎてしまう。

シライは、そんな様子を斜め後ろから眺めていた。

紙の半分には、棒人間が二人描かれている。

一人は「わかるわかる」と話し、もう一人は「あ、ごめんねごめんね」と答えている。

「集中的／気にしない／残酷／割りきる」

自分で書いた四つの性質を見て、シライは小さく笑った。

「何も忘れず、あやまりもしない人間なんて信用できひんなあ」

そうつぶやきながら、彼はあえて「忘却」と「懺悔」という言葉を紙の隅に書き足した。

忘れることと謝ること、その両方がないと、自分の悪霊は肥大してしまうと知っているからだ。

そこへ、遅れてガラリと扉が開いた。

「ごめんやで。仕事押してもうてん」

雄町のオバチャンが、コンビニ袋をぶら下げて入ってきた。

教室の空気が一気に明るくなる。

「先生、あんた給料、なんぼもろてんの？ こんな夜まで働かされて」

「そこの兄ちゃん、彼女できたんか？」

矢継ぎ早のツッコミに、周囲は笑いながらも、自分の懐を守る。

彼女の言葉はいつも核心を突く。

だからこそ、みんな少しだけ彼女を恐れていた。

講師のキツカワが、黒板の前に立った。

「はい。今日は皆さんに、自分の中の『悪霊』を一晩だけ外に出してもらいます」

「はあ？」とカナが眉をひそめる。

「ドストエフスキーの『悪霊』って小説があります。

町の人たちが、それぞれの思想や欲望にとりつかれて、騒動を起こす話です。

でも、ここで言う悪霊は、もっと小さい。

『こうでなきゃいけない』とか、『本当はこうしたいのに言えない』とか、

そういう、心の中であごめいているもの」

キツカワは、机の上の提出用紙を指さした。

「さっき書いてもらったキャラクターは、言うならば、皆さんの悪霊の姿です。
今から、その悪霊たちを一つの物語の中で出会わせてみましょう」

教室が静かになった。

最初に口を開いたのは、意外にもAだった。

「わたしの悪霊は……『ソウルメイト』という言葉かもしれません」

彼女は、湖畔のギャラリーの話をした。
夫と魂でつながっているという実感。
しかし同時に、その言葉に縛られてしまう自分。

「もし、彼が先に死んだら、わたしは誰とももうつながれないのでしょうか。
そう考えると、あの言葉は少し、怖い」

A子が、うなずきながら続ける。

「私は理想です。
『親は愛すること・愛されることを教える存在』
そう思って生きてきたのに、自分が親になった時、うまくできる自信がない。
それでも理想を捨てられない。
だから、『どっちでも良い、パートナーならいない方がまし』なんて強がりを言う。
それが、私の悪霊」

カナは椅子の背にもたれ、天井を見上げた。

「うー……るさいなあ、悪霊とか。
でもまあ、あるとしたら——『ベっぴんさん』やな」

「ベっぴんさん？」と雄町が食いつく。

「うち、誰にでも『あんた、ベっぴんさんやなー』って言うやろ。
ほんまにそう思ってる時もあるけど、半分はおまじないやねん。
自分にも、相手にも。」

きれいでいなあかん、ちゃんとしてなあかん、
そう言い聞かせるための言葉。
それが回り回って、自分を縛ってる気がする」

Iは、ノートから目を上げた。

「私の悪霊は、子宮と精子かな」
教室がざわつく。

「女はいい子宮もってるよ、卵を生むよ。
男よ、どんな精子を準備してくれる？
そんなふうに、命を物語にってしまう癖。
誰かの身体を、象徴として使ってしまう危うさ。
それでも、そこから離れられない」

シライが、静かに続けた。

「俺のは、忘却やな。
なんでも『わかるわかる』って言うて、『あ、ごめんねごめんね』って笑って、
本当には何も変えない。
忘れてしまえば楽やけど、そのたびに小さい罪悪感が積もっていく。
それが、俺の中で育ってる悪霊かもしれん」

最後に、雄町のオバチャンが腕を組む。

「うちの悪霊は、好奇心やろな。
『あんた給料なんぼもろてんの？』『彼女できたんか？』って、
つい聞いてまう。
人の懷にズカズカ入って行って、笑いにしてしまう。
ほんまは、自分がさびしいだけかもしれへんのに」

教室に、しばし沈黙が落ちた。

キツカワが、ゆっくりと口を開く。

「ドストエフスキーの『悪霊』では、悪霊たちは町を壊しました。
でも、今ここでしゃべった悪霊たちは、まだ小さい。
名前をつけて、物語にしてやれば、
きっと皆さんの味方にもなりうる」

カナが笑った。

「ほな、うちの悪霊には『べっぴんさん』って名前つけとくわ。
あんたらの悪霊も、けっこうべっぴんさんやで」

「それ、褒め言葉ですか？」とA子がつっこむ。

「もちろんやん。悪霊がおらん人間なんて、おもないやろ」

雄町のオバチャンが、机をぽんと叩いた。

「よっしゃ決まりや。
今日はみんな、自分の悪霊といっしょに写真撮って帰ろ。
給料は増えへんけど、話のネタにはなるで」

笑い声が教室を満たした。
窓の外では、雨上がりの夜風が、静かに木々を揺らしている。

その風の中を、それぞれの小さな悪霊が、
少しだけ肩の力を抜きながら、ふわりと漂っていった。



『森の端で光った日』

——原作テキスト:宮沢賢治 × スタジオジブリ・バージョン

たちばな教養学校 Ukon

「生成 AI との深い付き合い方」講師・橘川幸夫

ワークショップ作品

世界のどの地図にも描かれていない“森の端”には、古くから奇妙な寄り合い所があった。
それは季節に一度だけ現れ、人も獣も、影までもがふらりと迷い込むという。

雪の降りはじめた冬の朝、そこへ八つの“存在”がやってきた。
風が光を運び、森の奥でかすかに鐘が鳴った。

◆1 | 山田家の三人と、まだ名前のない影

太郎は歩きながら、胸の奥がしくしくと痛むのを感じていた。
父は野球ひとすじで、まるで人生そのものをバットの素振りで語るような人だった。
母・花子は「自由に生きていいのよ」と言いながら、心のどこかで“粹”の名残を隠しきれずにいた。

家族の愛はたしかにある。
けれど、その愛は太郎を「どんな形にもなれる粘土」にしてしまうようで、彼は時おり息苦しくなった。

森の風に向かってつぶやく。
「僕は、僕でいていいのかな」

その声は森の奥へ吸い込まれ、深い回廊をくぐり、やがて別の形で返ってきた。

◆2 | 語る馬・スペランレー

「いいともさ。人間は言葉が多くて、ほんとうの気持ちがどれなのか、わからなくなりがちだけどね」

振り向くと、一頭の栗毛の馬が立っていた。
名はスペランレー。かつてレースに出られず、傷ついた日々があった。
だが、その背には不思議な温かさがあった。

太郎が手を添えると、馬は鼻を鳴らした。
「だれも急がなくていい。風と同じ速さで歩けばいいんだ」

◆3 | 洞窟の怪獣・さとみ

「枝、拾った！」

雪を蹴散らしながら現れたのは、洞窟に住む怪獣さとみだった。
小さな目で枝を見つめ、しっぽをゆらゆらさせている。

太郎は笑った。

役に立つかどうか、それしか考えてこなかった自分の毎日にはない、素朴な自由がそこにあった。

◆4 | 背中に世界を背負う味噌屋・須見

続いて、樽を背負った男がやってくる。

「味噌をな、世界中に広めようと思っとるんや。まずはアメリカからや！」

皆はぼかんとしたが、須見の情熱は冬の空気に火を灯した。

その明るさは、どこかで太郎の心にも灯台のように差し込んだ。

◆5 | 信号機マンの告白

赤、青、黄の光が森にじんわりと差し込む。

それは、“信号機の中で暮らす男”が夜だけ姿を現したものだだった。

「僕の仕事は人を止めたり進ませたりだ。でもね、本当は……僕自身がどこかに進みたいんだ」

太郎は胸にふっと熱を感じた。

自分の心にも、だれかの声に合わせて止まり続けた日々があったからだ。

◆6 | 六百歳の森の巨人

森がぐらりと揺れ、長い影が一本ぬっと現れる。

六百年を生きた巨人だ。

「人は、自分の足音で歩くときにだけ、世界と響きあうのだよ」

巨人の声は大地のように深く、雪を溶かしてしまうほど温かった。

◆7 | 森が見せた“地図”

太郎は気づく。

父と母の価値観、馬の優しさ、怪獣の無邪気、味噌屋の情熱、信号機マンの迷い、巨人の知恵……。

それらはすべて、ひとつの大きな地図の断片だった。

そして言う。

「僕は、誰かの型じゃなくて、みんなの声を聞きながら、自分の地図を描きたい」

父は静かにうなずき、母はそっと太郎の肩に触れた。

馬は鼻を鳴らし、怪獣は枝を掲げ、味噌屋は遠くの国を語り、信号機マンは青い光で応え、巨人は森の風を太郎の背に送った。

◆8 | 森の端で光った日

夕暮れ、太郎の足元がぽっと青く光った。

それは、太郎自身の「進んでいい」という合図だった。

信号機マンが微笑む。

「ほら。進む色は、いつだってお前の心が決めるんだ」

森の住人たちは輪になり、太郎のこれからの旅をそっと照らした。

その光景は、まるで“家族”の新しいかたちのようなようだった。

その日、森の端で光ったのは――

太郎の心が初めて、自分の足音で歩きはじめた瞬間だった。



『声の谷の六人』

——大江健三郎『万延元年のフットボール』バージョン

たちばな教養学校 Ukon

「生成 AI との深い付き合い方」講師・橘川幸夫

ワークショップ作品

『声の谷の六人』

I 静かな始まり —— 谷に暮らす人びと

この谷は、地図にのらない。だが、昔から人は住みついており、互いの声が山にこだまするので「声の谷」と呼ばれていた。谷の中央にはゆるい川が流れ、朝と夕方には、鴨が小さな V 字を描いて空を渡る。その群れの中に、鴨川という名の鴨がいた。鴨川は十年ほどこの谷に住み、群れを導くことに心をくだいていた。

谷には六人がいた。右近、R、五十代の女性、鴨川(鴨)、雄町、F。

彼らは互いに大声で語り合うことはなかったが、谷を行き交うとき、どこかで相手の生活の匂いを感じながら暮らしていた。

II 歪み —— 右近が語り始める

静かだった谷に、ある日、小さな歪みが生まれた。

最初にそれを感じたのは右近である。

右近は、61 歳の自分と、未来に転生した 18 歳の自分を、同じ体の中に抱えたまま暮らしていた。

18 歳の彼女は怠惰で気まぐれ、

61 歳の彼女は周囲に合わせて生きようとする。

谷の朝霧の中で、右近は小さくつぶやく。

「働かないで生きていきたい。それがそんなに悪いことなのかしら」

その声は川面に落ち、ゆっくりと広がっていった。

谷の空気が少し変わった。

III 揺れ —— R の“方法”が谷をざわつかせる

つぎに揺れを起こしたのは、R だった。

R は、自分の願いを叶えるためには手段を選ばず、

スキルを総動員し、

誰かの懐に飛び込み、

結果をつかんでしまうという、不思議な才覚を持っていた。

谷の人びとはその姿勢に戸惑う者もいたが、

R は淡々と言う。

「結末がよければ、それでいいのよ」

この言葉が右近の心を揺らし、
雄町の胸をざわつかせ、
五十代の女性の静けさに影を落とした。

谷の共同体に、見えない裂け目がゆっくりと広がっていった。

IV 暴れ —— 鴨川が空を乱し、雄町が叫ぶ

その裂け目に、最初に敏感に反応したのは鴨川だった。

鴨川は、空の風をつかむようにして飛びながら、谷の変化を感じ取っていた。
群れの仲間が落ち着かず、飛ぶ角度さえ乱れてくる。
鴨川は羽ばたきながら、仲間呼びかけた。

「みんな、声が揺れている。落ちついて、群れの形を守ろう」

しかし地上ではちょうどその頃、
高校三年生の雄町が、空に向かって叫んでいた。

「腹減った！ 母ちゃん、飯！」

その声は、谷の空気をびりびりと震わせた。
食卓を求めるその率直な叫びは、
谷の全員の胸の奥の「飢え」に火をつけたようだった。

V 残響 —— 五十代女性と F が灯す灯

谷の動揺がもっとも深まったとき、
五十代女性が、ひとり静かに立ち上がった。

「一つひとつを大切に暮らしたいのです。
納得して、感謝して、生きていきたいだけなのです」

彼女の静かな声は、これまで抑えられていた谷の呼吸を戻すように、
じわりと谷の中央に広がった。

さらに夕方、F が帰宅し、
猫にほほをすり寄せながら、
流れるように音楽をかけると、
家の窓からこぼれたその旋律が谷の空気を整えていった。

生活の小さな灯りが、谷を照らしはじめた。

VI 終章 ——谷の未来は、未解決のまま続いていく

六人の声は完全に調和しない。
右近の自由の願いも、R の強い方法も、
雄町の叫びも、鴨川の羽音も、
五十代女性の静けさも、F の小さな幸福も——

それぞれが異なり、
異なるまま谷の空気を揺らしている。

しかし大江文学がそうであったように、
共同体の揺れは破滅ではなく、呼吸の再編成である。

谷の上を飛ぶ鴨川は、こう思った。

「みんな声を持っている。その声が揺れるのは、生きている証なんだ」

そして谷は今日も、
解決されないまま、
しかし確かに生きつづけている。



『風の通り道のバザール』——村上春樹バージョン

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ノルウェイの森』——

たちばな教養学校 Ukon

「生成 AI との深い付き合い方」講師・橘川幸夫

ワークショップ作品

週末の古い商店街に、月に一度だけ姿を現す市場がある。
人はそれを「風の通り道のバザール」と呼ぶ。どこから来て、どこへ消えるのか、誰も知らない。ただ、
気がつくと軒先にテントが立ち、見慣れない屋台が風に揺れている。
夕暮れになると、何もなかったかのように消えてしまう。

僕がそこを初めて訪れたのは、大学での講義帰りの夕暮れだった。
シャッター通りのはずの場所が、仄かな灯りに満たされていた。
ざわめきは懐かしさを含んで耳に入り、遠い昔の記憶をそっと掘り起こした。

■1

最初に声をかけてきたのは、ヒロだった。

「おい、兄ちゃん。迷ろてんやろ。しゃーないな、ついてきい」

彼の関西弁は、どこか風のように軽かった。
ロックの話をしながら歩くうち、彼の人生が少しずつこぼれた。
裏切られたこと、信じすぎたこと、それでも誰かをまた信じようとする生来の性質。

「ま、性分いうやっちゃ」と笑った横顔に、かすかな寂しさが揺れていた。

■2

露店の奥、小さな茶店で細 尚子が湯気の立つ急須を扱っていた。

「知らんけど、ここ座り。あんた疲れてるわ」

言葉は短いのに、不思議な温度があった。
彼女の口癖、「それ」「いややわ」「よう言わんわ」が、
風鈴みたいに軽く、胸のどこかを鳴らした。

彼女は自分の人生を饒舌に語るのではない。
ただ、言葉の切れ端をこちらにそっと渡してくる。
その断片は、あとで急に胸を温かくする火種のように思えた。

■3

路地を抜けると、センバユミが屋台で丼を睨んでいた。

「触らんといて！ あたしの食べ物やから！」

少し怒ってはいるのに、どこか可笑しい。
聞けば店主が勝手に具を足したらしい。
会話は飛び散り、論旨はときおり迷子になったが、
彼女が探している“居場所のなさ”だけはくっきりと伝わった。

そのまっすぐな不安定さが、僕自身のどこかと響き合った。

■4

角の広場では、歌手志望の C が小さなアンプで歌っていた。
声に深みがあるが、途中で立ち止まっては愚痴をこぼす。

「なんであの作曲家、オレにはええ曲くれへんのや」

その隣で、29歳のコンビニ店員がうつむきながらつぶやいた。

「この前、おばあちゃんが床ですべったん…あれ、私のせいやろか」

C は誰かのせいにする癖を手放せず、
彼女は何もかも自分のせいにしてしまう。
対照的なのに、どこか奇妙に寄り添っていた。
風の通り道は、ときに正反対の心を引き寄せるのかもしれない。

■5

古本屋の前では、少年のような瞳を持つ老人——牟林健二が静かに佇んでいた。

「興味持ったことはな、どんどん知りたかったんや。
せやけど、親も教師も、教え方までは教えてくれへんかった」

バザールの喧噪の中で、彼の言葉だけが澄んで響いた。
学びたいという純粋な衝動は、どんな時代にも風のように漂い続けるのだろう。

■6

夕暮れが迫るころ、白いストールを巻いた emi が、山の香りをまとって現れた。

「高野山でね、“最後の仮眠”と思ったの。でも、生きてた。
生きてたから、また来て良かった」

短い言葉なのに、一度は断崖に触れ、
その縁から戻ってきた人だけが持つ透明な気配があった。

■エンディング

いつのまにか、市の灯りがひとつ、またひとつ消えていった。
語り手たちは影のように薄れ、風の粒子に溶けていく。

最後に細さんがふっと笑った。

「知らんけど、また会えるわ。
人はみんな、どっかでつながっとるから」

気づけば、商店街はいつもの静けさに戻っていた。
バザールがほんとうに存在した証拠はどこにもない。
それでも、耳の奥では彼らの声がかすかに残響していた。

まるで、人生のどこかにある“風の通り道”が、
この夜だけ淡く可視化されたかのように。

午後の気配



『午後の気配』——サリンジャー・バージョン

たちばな教養学校 Ukon

「生成 AI との深い付き合い方」講師・橘川幸夫

ワークショップ作品

午後の三時、ぼくは駅前の喫茶店にいた。
天気は悪くないのに、胸の奥が少し湿っていて、その理由はよくわからなかった。
こういうとき、人はアイスコーヒーを意味もなくかきまぜたりして、
その音で自分の機嫌を測ろうとする。

向かいの席では、図書館司書の横山さんが文庫本を読んでいた。
ページをめくるたび、小さな息をつく。
「読んでいる時間だけは、たぶん他の人生より少しましなのよ」
そう言い出してもおかしくない空気だった。
彼女がいると、店の空気がすこし静まり、
その静けさに、ぼくの湿りも少しだけ薄まった。

入口のベルが鳴り、大江君が入ってきた。
彼は十七歳で、老人ホームのボランティアをしているらしい。
ポケットの中で握る小銭の音がかすかに震えていて、
誰かの名前を思い出そうとしている人の仕草に見えた。
カウンターに座った彼の背中が、
「大人になるのが少し怖い」と言っているようだった。

カウンターの端では、七十歳の吉田さんが昼からビールを飲み、
店主に「あなたの愚痴は、全部ノロケよ」と笑った。
彼女は誰の話も聞くようでいて、本当は何も聞いていない。
その距離の置き方が、かえって人を救うことがある。
ぼくはそういう大人が、世界にもっといてもいいと思った。

テラスでは犬のポチが尻尾を振り続けていた。
飼い主の Dさんは五十代の女性で、
「もっと遊んで」と言われているみたいに笑っていたが、
笑い終えた瞬間の横顔に、別の影が差すのを
ぼくはなぜか見逃さなかった。
幸福そうな人の影ほど、やけに胸に残る。

窓際の席では、異国の街を歩くような目をした Iseさんが
スケッチブックを開き、店の外の人の流れを描き写していた。
「知らない世界は、まだどこかに落ちているはず」
彼女はそう信じているようだった。
描きながら、ときどき顔を上げ、
“今日の世界はどこに隠れている？”
と、誰かに問いかけるような目をした。

その隣で、日下部さんがうつむいてコーヒーを冷ましていた。
四十代後半、精神的に疲れたサラリーマン。
胸の奥に同じ重さを抱えている人を探しているのに、
誰も本当のことは言わないし、
彼自身もまた言わない。
沈黙を守ること、どうにか形を保っているように見えた。

そこへ、センバアユミさんが入ってきて、
店内が少しだけ明るくなった。
彼女は二十五歳、食べることが好きで、
ケーキセットを注文すると、
子どもみたいに嬉しそうに目を閉じた。
しかし、目を開けた途端、
その表情は伏し目がちになり、
さっきまでとはまるで違う影が落ちた。
幸福と孤独の境目が、
スプーン一杯分くらいの薄さしかない人だった。

店全体が、ひとつの大きな呼吸をしていた。
ゆっくり吸い、ゆっくり吐くような。
誰も気づかないが、
まるで見えない糸でゆるやかにつながれているようだった。

その時、視界の端に“シビルの恋人”とだけ書かれた提出シートの人物が見えた。
松永さん。
彼女は誰かを探しているように、入口の近くで立ち止まっていた。
探している相手は、まだ会ったことのない誰か——
そんな感じがした。
ぼくは思わず胸に手を当てた。
午後の湿りが、少しだけ形を持ち始めた気がしたからだ。

午後の光のなかで、
それぞれの影がほんの少し触れ合いはじめるとき、
物語は動き出す。
まだ誰もそのことを知らないだけで、
気配はもう、始まっている。



『森を歩く十二人の仲間』——グリム童話バージョン

たちばな教養学校 Ukon

「生成 AI との深い付き合い方」

講師・橘川幸夫

ワークショップ作品

大学の森に、十二人の影が集まった。
それぞれが違う人生を歩み、違う悩みを抱え、違う声を持っている。
だがその日は、不思議な案内人に導かれ、
ひとつの旅の仲間として歩きはじめることになった。
森は昔から、人の心の奥にある願いを映し出す場所。
十二人の言葉は、そこに落とした小石のように、
静かに波紋となって広がっていく――。

むかしむかし、ある深い森の入口に、
料理が苦手ないつもがんばり過ぎてしまう老婆・海山 が立っていた。
彼女のかごには、失敗したサラダと、折れたアスパラが入っていた。

そこへ北の国から、
人と関わるのが苦手な青年・蜜柑 が現れた。
「森は自由だよ。昔は神さまも見ていた」と、彼は小さくつぶやいた。

二人が並んで歩きだすと、
雪のように白い毛の スペランレという馬 が、
静かに森の小道を踏みしめてあらわれた。
彼は人を乗せるのが仕事だったが、
「人間はこわいようで、そうでもない」と、ひとり言を言った。

さらに奥へ進むと、洞窟からひょっこりと
さとみという怪獣 が顔を出した。
「おなかすいたなあ。いい木の枝、見つけた」
彼女は森の仲間になりたいくて仕方がなかった。

道端では、信号機マンが赤から青へと忙しそうに光を換えていた。
「夜中だけは自由に動けるんだ」と彼は誇らしげに胸を張った。

木を揺らす風の中には、
600 歳の森の精霊が、にこにこと漂っていた。
「人間の世界をもっと知りたいのだよ」と、
彼は枝に座りながら言った。

すると別の木陰から、
腰の痛い 金子さん(寝たきりのおばあちゃん) の声がした。
「どうして体が思うように動かないのかしら……」

しかしその声は、森の鳥たちに優しく包まれていた。

しばらく歩くと、

夜の灯りのように、小さな酒場がぼつんと現れた。

そこには、

パートナーと猫とともに生きる KK さん(BAR の店主) がいた。

「責任の所在ってね、案外あいまいなものよ」

彼女が出した梅とカツオのおにぎりは、

旅の仲間の心をほぐしてくれた。

さらに進むと、

急ぎ足の 斎藤さん が落ち葉の上をすべるように歩いていた。

「今日も無事にすぎていく……すぎていくの」

彼女は、森が時間をゆっくりにしてくれる気がしていた。

そして最後に、

小さな石橋の上でうずくまっていたのは、

“役に立つかどうか”をいつも考えてしまう発明家・橋本さん。

「なにかできるかな。もうかるかな……」

彼の言葉に、旅の仲間たちは微笑んだ。

十二人は輪になり、

それぞれが胸の内にあたためていた小さな願いを、

森にそっと預けた。

森はそれを聞き取り、

大きな声ではなく、

木々のささやきで答えた。

「ひとりでは歩けない道も、

仲間となら光がさす」

そして十二人は、

森の奥へ、さらに奥へと歩いていった。

まだ見ぬ未来の自分に出会うために。

——こうして“森を歩く十二人の物語”は始まった。